エピソード70

15年越しの恩返し

人と人 つながりの物語

コープデリグループの組合員数は約550万人。組合員の皆さんの数だけ、物語がある。その物語を毎月一つお届けしていきます。描いているのは皆さんのくらしとコープデリの接点。あなたの物語はどんな物語ですか。



illustration：Maiko Dake

コープデリグループは、組合員から集めた「ふくしま復興応援募金」を、今年も福島県に寄付した。同募金は2019年度まで続けた「東日本大震災復興支援募金」の後継プロジェクト。震災によって困難を抱える人が多い福島県への支援を、現在も続けている。

震災直後、東京電力福島第一原子力発電所がある双葉町町民の2割近くが埼玉県加須市に避難した。明美（あけみ）さんはその一人で、今も同市で暮らす。

避難所を出てから、多くの人に助けられたことがしきりに思い出された。友人・知人、企業、有志の団体や個人による物資提供や励ましの言葉。明美さんは避難所から仕事に通っていて日中は幼い子どもや高齢の両親と一緒にいられなかったものの、みんなが「温かい食事を食べられた」とうれしそうに話していて、本当にありがたかった。でも当時は毎日必死で、全員に感謝を伝えられなかった。コープみらいが物資や炊き出しの支援をしていたことはよく覚えていて、後になって継続的な寄付についても知り、「機会があればお礼を言いたい」とずっと思っていた。

……§……

避難生活は日常となり、10年前には加須市内に家を建てた。6歳だった息子は大学4年生になった。それでも「いまだに気持ちは行ったり来たりですね」と明美さん。「いつまでもくよくよせず、前を向こう」と思える日もあれば、「福島に残っていたら、今頃何をしていただろう」と考えてしまう日もある。

でも、感謝を伝えるために思い切って行動したことで、新たな世界が開けた。7月に福島県庁で行われた「ふくしま復興応援募金」の贈呈式に、組合員代表として参加し、県知事とも懇談。長年支援される側だった明美さんにとって、支援する側に立てたことは前向きな力になった。これからもきっと、人を助けることで明美さんの心は癒やされていく。「ブロック委員として覚えることがいっぱいで、頭がパンクしそう」と明美さんは笑うが、活動が自分の新しい居場所になればと願っている。還暦を迎えての新しい挑戦は、始まったばかりだ。

今年2月、コープみらいがブロック委員を募集していると知人から聞いた明美さんは、迷わず説明会に足を運び、15年越しに感謝を伝えた。そして、恩返しの気持ちからブロック委員となり、「みらいひろば」（※2）の運営などに尽力している。「お店や宅配は知っていましたが、平和や環境保全などの取り組みもしていることは知らなかったので、こうした活動を知るたびに感動しています。開発途上国を支援するハッピーミルクプロジェクトも、素晴らしいですよね」と目を輝かせる明美さんは、各地の災害復興支援にも意欲的だ。初めて双葉町への一時帰宅が許されたとき、「大事なものはこれに入れて持ち帰るように」と袋を一つだけ渡されたショックは忘れられない。土砂やがれきが片付けられ、住宅や施設が再建されても、元の故郷は戻って来ない。復旧・復興が進んでも埋められない、そうした悲しみを知っているから、被災者に寄り添った支援をしたいと思う。

※1 地域でさまざまな活動をサポートするコーディネーター役を担う組合員。地域により名称は異なります

※2 コープみらいが開催する、組合員・地域の方が誰でも参加できる集いの場。各地域で基本月1回開催

過去の物語もこちらから読めます

あなたのエピソードをお寄せください。

コープ職員との心に残る出来事を随時募集しています。氏名・電話番号・組合員コードを記入し、郵便（〒336-8526埼玉県さいたま市南区根岸1-4-13 コープデリ連合会 コミュニケーション推進部宛）か、左記のWeb応募フォームよりお送りください。

◆実際にあったコープに関わる人と人との交流を取材し、読み物の形にまとめています。登場する人物の名前は仮名の場合があります。イラストはイメージです。